

進化と人間の利他主義

—生命の樹と聖夜について—

Evolution and human altruism

The interpretation of Sephirothic Tree and Holy Night

平山 朝治

HIRAYAMA, Asaji

ダーウィンが描いた生命の樹

2008年に東京と大阪で開かれたダーウィン展は、2009年の生誕200年に因んで世界中を巡回し、ダーウィンの人生を追体験することによって進化論に対する理解を深めることを意図した展覧会で、私も少なからぬ感銘を受けた。

なかでも、地上のあらゆる生物は共通祖先から生じ、徐々に複雑な特徴を発達させたという説は、ダーウィンの祖父が1794年の著書『ズーノミア』で唱えており、彼に影響したはずだという指摘のあとで、孫のダーウィンがノートブックBの36ページに“I think”としたためた下にした、共通祖先①からの系統樹⁽¹⁾をみた際、進化論の無神論・唯物論的解釈とは全く異なる意味がそこにはあるように感じた。

系統樹とは系図であり、全ての生物の共通祖先はその子孫にとって神的存在だと、祖先祭祀の伝統のある社会に育った私は直観したのだ。そのような進化思想の先達もみつけた。『生誕100年 岡本太郎展』（東京近代美術館、2011年）で、太陽の塔の内部に置かれた生命の樹について、人間は思い上がりを棄てて単細胞生物にまで降りなければならないなどと岡本太郎が語る場面が放映されていた。生きとし生けるものすべての祖先から発する系統樹であ

る生命の樹と自己とを一体化させるような思想を彼は表現し、人類の進歩と調和という大阪万博のテーマと対決したのであろう。

岡本太郎記念館では生誕100年を記念して生命の樹の1/20レプリカが再現展示されていたので、早速見学に行った（次ページの写真はその際著者が撮影した）。根元の原始生物群には根源的な生命力の充満と躍動が感じられ、下に降りて始原の生命力を取り戻そう、根本に帰って地上の生命の一体性を実感しようと、彼は言いたいようだ。地上の全ての生物は同じ祖先から発したきょうだいであるということを見事に表現した思想が1970年の大阪万博においてこのような形で公にされていたことは、現代日本が世界に誇れることの一つであらう。

とはいえ、共通祖先にまで遡って子孫たる集団成員の一体性を喚起しようとする発想は、人間（ホモ・サピエンス）独自のものであろう。他の生物の自己犠牲的利他行動は遺伝的に大きく規定されており、おそらく人間だけが、血縁関係を意識化したうえで柔軟に応用することによって、遺伝的な規定からある程度自由な存在となりえたのであり、だからこそ、地上の生きものはみなきょうだいだという思想を抱くこともできるのだ。



利他主義を進化論的に説明しようとする試みは、血縁に着目する包括適応度の理論が登場して以降、それに対する批判も含めて多い (Nowak[2012], Boehm[2012]) が、血縁擬制に焦点を当てたものは管見の限り平山 [2003a] の他にないようである。

同母異性きょうだいを表わす「イモセ」が夫婦をも意味し、配偶者の父母が実の父母に擬えられるように、実際の血縁から大きく逸脱するような血縁擬制の端緒は、婚姻・姻戚関係という制度の成立に求められるだろう。人間と最も近い現生種であるチンパンジーやボノボは夫婦・家族関係を知らず、複雄

複雌の父系 (patrilocal) 集団を単位とし、子どもの父親はその集団内の雄だが、乱交的なので特定されない。人間と最も近く、10 万年ほど前に中東で交雑し、2 万 8 千年前まで共存していたネアンデルタール人にも家族がなく、数十人単位の「バンド」を形成していたらしいという説 (河合 [1999] p. 105) に従って、平山 [2003a] では、ネアンデルタール人と人間の共通祖先に家族はないという前提のもとで婚姻・姻戚関係の起源を考えた。しかし最近、440 万年前のアルディピテクス・ラミダスは雄の犬歯が小さく他の性差も少ないことから、すでに一雄一雌のペアバンドを形成していたとする説 (Lovejoy[2009]) が有力視されるようになった。また、早期の離乳による多産化と脳の拡大に伴う子どもの成長の遅れという生活史の変化などからみて人類 (ヒト亜族) の家族は 180 万年前のエレクトスの時代に確立したということも通説となっている (山極 [2012])。そこで、それらの新しい知見によって平山 [2003a] の議論を修正してみたい。

姻戚関係とインセスト

初期人類アウストラロピテクス・アフリカヌスやパラントロプス・ロブストスの社会もネアンデルタール人の社会も、チンパンジーやボノボと同様に父系だった (Copeland et al. [2011], Lalueza-Fox et al. [2011])。したがって、初期の人間社会も父系であったと思われる。しかし、現生類人猿の雌は転出ののち出身集団との関係を失うのに対して、人間の女性は婚出後も生家との繋がりを保ち、生家と婚家、生まれ育った共同体と嫁ぎ先の共同体との関係を媒介する。

ラミダスないしエレクトス以降の人類にペアバンドを伴う家族や、いくつかの家族の集合としての

「バンド」が存在したとしても、女性を媒介として「バンド」間の絆が安定的に維持されることは人間以外にはなかったと思われる。というのは、ネアンデルタール人は長距離交易を行わないのに対して、20万年前に登場した人間は13万年前ころには長距離交易をしており (McBrearty & Brooks[2000] pp. 515, 532, 河合 [2007] p. 101), 長距離交易の基盤として、女性が出身「バンド」と嫁入り先「バンド」とを媒介するネットワークが存在したと考えられる (平山 [2008]) からである。

人間の家族は一夫一妻, 一夫多妻, 一妻多夫, ナヤールの多夫多妻母系など多様だが, 婚姻によって二人の生家や親族, 王家の国家など, 男女それぞれの生まれ育った集団同士の関係が形成されたり強化されるという特色がある。それは人間とネアンデルタール人の共通祖先には希薄であり, 人間成立の社会構造上の決定的な指標になると思われる。結婚を二人の個人の結合とする近代核家族イデオロギーはこのことを見えにくくし, ペアボンドの形成を重視して人間家族の起源を考えさせがちだが, 両家の儀式とみなす日本などの伝統的な結婚観には, この特色が明瞭に現われている。

姻戚関係成立の背景には, インセストを巡る心理や社会規範が存在すると思われる。

人間にも類人猿にも, 同母きょうだいなど, 幼いころから一緒に過ごした異性には, 生殖可能になった後, 性的魅力をあまり感じないという, インセスト回避心理が存在することが示されている (西田 [2007] pp. 107-18)。しかし, 人間のインセスト・タブーには, 人間に最も近い現存生物であるチンパンジーやボノボのインセスト回避によっては説明できない点がいくつかある。チンパンジーにおいては, 母親が離乳期の男児としばしば性交し, それは断乳

の代償となっている (西田 [2007] p. 109) が, 人間においては思春期前であっても母子相姦はたいてい禁じられている。これは人間に関するフロイトの口唇期 (2歳まで) や男根期 (3~6歳) と対応させることができる。母と同衾する成年男性が, マカク, チンパンジー, ボノボなどでは育児としてあたりまえに行われている, 母と性的に未成熟な息子の性交を嫌い, 妨害したであろうという風に, 男根期男児の母に対する幼児性欲を父が抑圧するというエディプス・コンプレックスの起源は, 進化論的に説明できる。

人間の場合, 断乳の代償として母から子に与えられるものとして, 禁じられた性交の代わりに音楽や言語によるコミュニケーションが発達してきたと考えられることもできる。幼児に歌い聴かせ, ファンタジーを語り聴かせることによってストレスを解消させ, 精神的安定を与え, 寝かしつけるということが, 音楽や言語の発達にとってかなり重要な場面であったと思われる (子守唄については山極 [2012] pp. 274-6)。芸術や言語を伴う創造的な活動の多くは高揚した性欲が昇華することによって行われるのも, 芸術や言語が成立・発達した主な場のひとつがそのようなものだったからではなかろうか?

また, 男根期に母との性交が禁じられて抑圧された母子相姦願望が, 性的成熟後も影響していることは, 人間の男性の多くが女性の乳房に性欲を催して吸いたがり, 乳児が母に抱かれるような, 顔や乳の見える体位での性交が発達したことに現われている。寝床で前戯を含む長い情交をしたあとで一緒に寝ることが好まれるのも, 母子的である。チンパンジーやボノボの社会では娘が成熟すると生まれた集団の外に出るが, 母と息子は終生同じ集団に属するのであり, 同様に父系集団を形成していたと思われる初期

人類・人間のペアボンドを安定化させるためにも、母息子関係に擬えるのが最も効果的だっただろう。

フロイトが母息子と対称的に考えた父娘関係は、進化論的にみるとどうだろうか。ペアボンドを形成しはじめたころの人類社会においては母親の配偶者と血縁上の父親とが一致する可能性はそれほど高くはないし、母親が配偶者を変える頻度も低くはなかったはずだ。したがって、児と父（母の配偶者）との間に父子の血縁関係がある可能性は高くないのであり、児が生まれたあとで母の配偶者が変わっていれば彼が血縁上の父である可能性は低い。父息子では、血縁の欠如や、自分が父親ではないかもしれないという疑惑は、息子との関係を疎遠ないし敵対的にしがちだが、父娘では、それらは娘を性の対象としてみるよう促すことになる。また、娘は成長とともに性的魅力を増し、若かったころの母親に似てくる。しかし、配偶関係が安定化し、父が母息子相姦を嫌い、妨害したがるようになることと対称的に、あるいはそれを受け入れる交換条件として、母も父娘の性的関係を妨害しようとするだろう。したがって、男児と同様のコンプレックスが女兒を巡っても形成されるというフロイトの説はおおむね認めてよいように思われる。しかし、男児の場合は男根期、女兒の場合は思春期に、親子相姦願望のピークがあるという違いはあるだろう。思春期不妊のため、チンパンジーやボノボの男根期男児の母との性交と同様、人類の思春期女兒の父との性交も近交弱勢の淘汰を免れて一般化する可能性があったはずで、そうはならずにインセスト・タブーが形成された端緒は、夫婦同衾化に伴って父が母息子間性交を、母が父娘間性交を、血縁の有無にかかわらず嫌って妨害したことであろう。その結果、少なくともパートナーの目の前で異性の子と性交することは男女とも控える

ようになったと思われる。乱交的な公然性交によって社会関係を調節するボノボと対照的に、他人（ひと）目を避けて性交することで葛藤を回避しようとする人間の習性の発端も、ここにあるのかもしれない。ボノボは雄の攻撃性が少なく、犬歯の性差も人間のように小さい（Dagg and Harding[2012]p. 81）が、人類とボノボは性の秘匿化と公然化という正反対のやり方で雄同士の葛藤を抑制するような進化の道歩んできたことになる。

ところで、チンパンジーの野外観察によれば、隣接集団との接触の機会が少なく若い雌の他集団への移籍が困難となり、インセストが起りやすくなる（西田 [2007] p. 110）。人間への進化の際にも寒冷化に伴う人口減の際には同様の傾向がみられただろう。そのような状況においては、インセストによる出生増加のメリットが近交弱勢のデメリットを上回ってインセストを許容するような遺伝的傾向が自然選択の結果現われえることが理論的にも示されている（青木 [2001]）。雌が生まれた集団から出て行かない場合、インセストが起りやすい傾向はゴリラでも明らかになっており、人間にも受け継がれていると考えられる（山極 [2012] pp. 153-5）。

インセストへの許容度が、寒冷化・人口減などの環境要因によってかなり強くなった後、温暖化・人口増によって「バンド」が分裂するなどし、女性の他「バンド」への移籍が容易になるとともに、それを奨励すべくインセストを社会的な規範で抑圧するという風にして、インセスト・タブーが成立したと思われる。南極で得られたデータをみると約 20 万年前に人間が登場する直前の 5 万年ほどの間は目立った温暖化と寒冷化が 2.5 サイクルほどみられるように気候変動が目まぐるしかった時期であり

(<http://www.globalwarmingart.com/wiki/File:Ic>

e_Age_Temperature_png), インセスト回避の範囲や強弱を柔軟に調整できる社会的な規範を形成して草創期の人間はこの時期とそれに続くリス氷期を乗り切ったのではなかろうか。母息子相姦の出生増加効果は希薄なので、異性きょうだい間相姦の許容や禁止が重要だったのではなかろうか。

姉が幼い弟の子守をし、母に倣って性交であやすといったことが、人間社会形成期において最も自然な異性きょうだい相姦で、姉の他「バンド」への移籍が遅滞するうちに二人とも生殖可能になるまで成長して子どもが生まれ、姉弟で子育てをするという風にして、人間夫婦の同衾嗜好と性別役割分業が発達したのではなかろうか(ネアンデルタール人は女性も子どもも狩猟に参加していたように、性別役割分業は未発達のようなのである)。姉妹が他の男性と交わって出産しても、同居兄弟は子育てを手伝うだろう。昆虫などで発達している役割分業は血縁係数の高い間柄でみられる。父母間に血縁関係がない場合、同母異性きょうだいの血縁係数は異父 $1/4$ 、同父 $1/2$ であるが、近親婚を繰り返すほどきょうだいの平均血縁係数が高まって性別役割分業が発達したのではなかろうか。

異性間恋愛関係が異性きょうだい関係に擬えられることによって夫婦同衾と性別役割分業が異性近親夫婦以外にも普及するようになると、インセスト・タブーの成立とともに、インセストへの傾向が抑圧・昇華されて婚出・移籍した者とその血縁者との間の終生の愛着を生み、それをもとに姻戚関係が形成されたと考えることができる。

きょうだい婚の場合、祖父母と孫との間の血縁係数も高くなるので、祖父母が孫の養育に積極的に参加するような動機を与える。ハミルトンが示したように、近親交配率が高いほど女性比も高くなる。そ

のような時期に子育てを手伝い、母子に食料などを供給する男性の不足を補うため、祖父母の寿命が延びるような進化が起こったのではないかと思われる。ネアンデルタール人に比べて後期旧石器時代初期(Early Upper Paleolithic)の人間の寿命が著しく長い(Caspari and Lee[2004])のは、人間においては近親婚の頻出を契機として祖父母の孫養育への支援がはじまり、非近親婚の場合も含めて一般化した結果であろう。また、祖父母・孫関係が結婚生活を始める当初から期待されるようになったことが、結婚を両家の結合と考え、姻戚関係を重視するよう促したと思われる。

リス氷期後の温暖な13~10万年前ころに発達し、人口増加をもたらした長距離交易は姻戚関係ネットワークによっていると思われ、穿孔した小巻貝のビーズもそのころ現われており(Vanhaerene et al.[2006], 河合[2007] pp.92-4), 寶貝のような貝殻貨幣の源であろう。人間の脳新皮質の大きさは150人程度の集団サイズに対応しており、それを超える規模の社会を形成するには言語が必要だという説がある(ダンバー[1998]4章)が、150人を超える社会は姻戚関係によって形成されはじめ、同時に長距離交易と言語も発達しはじめたと思われる。あるもので別のものを意味するというシンボルの基本的特徴は、禁じられたインセストを代わりに果たす存在、異性近親の代理として配偶者を意味付ける作用に発し、インセスト願望の昇華として発達したものであろう。社会的なルールによってあるものが禁止されると、はけ口を求めた欲望が代償的満足の対象を見いだし、あるいは作りだすという作用が、言語的シンボル形成のもとにあると思われる。とくに、複数の「バンド」にまたがって親族・姻戚関係が形成されると、日常的には顔を合わさないよ

うな親族・姻族をシンボルによって表現する必要性が高まる。地名・「バンド」名・家名プラス親族呼称といった風なシンボルの使用とともに、親族・姻族関係が発達したと思われる。

人間が第三者に見られないところで秘め事として性交したがるのは、異性を巡る男性間葛藤を減らしたラミダス以来の習性の一つであろうが、インセスト・タブーの形成とともに、密かに禁忌を侵犯したというインセスト願望を副産物として生みだし、超自我とイドの葛藤という複雑な心理構造を帰結しただろう。この葛藤が、姻戚関係や言語のほか、宗教・芸術をはじめとする高度な精神文化を創造する原動力になったと思われ、そのことは現代においても変わっていない（平山 [2009] 4巻）。また、近親に擬えられる相手と禁忌を犯す真似事をして楽しむという意味付けが性交に与えられ、親子・きょうだい間のような情愛を男女の間にもたらしたと思われる（榎本 [1998]）。

多様な家族形態と血縁擬制

以上のように、インセストの許容から禁止への移行を媒介とした姻戚関係の成立は、人間社会を大規模化・広域化するとともに、その構造を一挙に複雑化したため、言語の発達が必要とされたと思われる。姻戚関係のもとには、祖父母が孫の養育に積極的にかかわる慣行があり、その具体的なあり方に規定されて、ペアと未婚の子の2世代からなる核家族のほか、3世代以上からなる直系家族や父系複合家族、母系家族といった、多様な家族形態が発達したと思われる。人間にとって可能な家族形態や姻戚関係は、遺伝的に決定されないような幅を持ち、社会規範に従って組織され、遺伝的進化よりも柔軟かつ速やかに進化したと思われる。そして、言語によって血縁

擬制の多様で柔軟な活用が可能になったと思われる。

血縁擬制は人間社会においてさまざまな集団形成・維持に使われている。儒教圏の宗族などの父系出自集団は、父子の血縁関係の連鎖を重視し、何世代も遡る祖先を父系（男系）で共にする子孫の一体感を作り出す点で、二者間の血縁の濃さによって利他行動を説明する包括適応度の理論から大きく逸脱しており、血縁擬制の面がある。

戦前の日本臣民は天皇の赤子とされたが、『記』『紀』や『新撰姓氏録』では日本人全員が天皇の男系子孫（皇族または皇別）とされているわけではなく、天皇と赤子の関係は非血縁者をも含む血縁擬制であった。また、独身聖職者で実の子などいないはずのローマ教皇はパパと呼ばれ、カトリック信徒はパパの赤子である。地上の全生物は祖先を共にするきょうだいだとか、現生人類はみな13~20万年前に生きていたひとりの女性（ミトコンドリアのイヴ）の母系子孫だということは科学的に実証されているだけでなく、単系出自集団の論理によって全人類や全生物の一体感を生み出すことも可能である。

父祖に発する父系出自集団の論理は、排他的で権威主義的な集団を作るのに向いており、その集団の外部の人々はしばしば軽蔑される動物などに擬えられる。これは自分たちの血統上の優位や、外部集団との血縁のなさ、あるいは遠さを主張したもので、自分の属する集団のために自分の命を危険に晒したり棄てるような行動を引き起こすと同時に、外部の者を情け容赦なく殺戮することを正当化し、戦争や民族浄化を引き起こす。レーニンがロシア人を軽蔑したが父方祖父からロシア人の血を受け継いでいなかった保証はなく、ヒトラーは父方祖父がユダヤ人かもしれないという家系調査結果を1930年頃知らされ、ポル・ポトはきょうだいが王夫人や王宮書記

官になったという家系を隠した。彼らのジェノサイドは、自らの内にも流れている（かもしれない）血統を否認したいという動機から身内（かもしれない）民族や自分と同じ社会階層（都市住民・知識人）に向けられたものと思われる（平山 [2003b] 3節）。

皇位継承の男系主義は藤原道長より前の平安時代と旧・現皇室典範にしかみられず（平山 [2009] 5巻）、スサノオが新羅から渡来したとする『日本書紀』一書の説や応神出生譚などから、継体以後の天皇家の父系（男系）は新羅王と同祖であり、応神は即位しておらず、応神五世孫である継体が日本の天皇家に入婿即位したことが読み取れる（平山 [2011] [2012]）。これらのことに着目すれば、日本の天皇制は、排他的・民族主義的ナショナリズムから脱し得るように思われる。

血縁擬制は宗族やナショナリズムのように意識して利用されるだけでなく、その社会の家族・親族・姻族・家業経営体のあり方が無意識のうちに人々の行動を強く規定し、社会全体のさまざまな領域・場面においてそれらが反映される（平山 [1995] [2009] 4巻）。

聖夜

フロイトは、イエスの贖罪死とは父なる神殺しの同害報復であり、それによってキリスト教徒は父なる神の権威から解放されたと説いたが、子なる神を強調するキリスト教も、幼帝が登位して成年に達すると譲位する慣行とともに政治権力を摂関・上皇や武家に握られた日本の天皇も、家父長的な神・教皇・天皇像と矛盾する、反権威主義的特性を社会にもたらしたと言えよう。

イエスの自己犠牲的な贖罪死は全人類に対する自

己犠牲的利他とみなされるもので、自分の属する集団のために命を棄てるような父系出自主義の自己犠牲的利他とは質的に異なり、全人類の祖、さらに言えば生きとし生けるものすべての祖の立場に聖母子を置くようなものと言えるだろう。イエスが世界を創造した唯一神の子とされるのも、その利他主義が父系出自主義による限定を超えたものであることを含意していると解釈できるし、無原罪の御宿りの思想はマリアを知恵の樹の実を食べる前のイヴに擬えているとも言える。

自己犠牲を伴う普遍的利他・愛・慈悲は、キリスト教と大乘仏教に共通する思想であり、いずれも紀元1世紀に形を整えた。そのような思想が登場した背景には、中国とインドや、インドとローマ帝国のように、遠方であって当時の技術水準においては相互に軍事的な脅威とならないような大文明の間の交流が盛んになったことが挙げられ、ローマ帝国とインドの間では季節風を利用した直接貿易がそのころ殷賑を究め、キリスト教がインドに伝播して大乘仏教の確立など利他精神の高揚をもたらした（平山 [2007a] [2007b]）。

現代日本において、クリスマス・イヴは恋人達にとって特別な夜となっている。血縁関係に擬えて性的関係をとらえたことが、人間独自の自己犠牲的利他行動を生み出したとすれば、それを思想的に突き詰めた存在といえるキリストの誕生を祝う聖夜が恋人達のためのものであるのは、その思想の本質をとらえたものであり、これ以上の祝い方はないと思われる。そして、常緑樹・クリスマスツリーは生命の樹の象徴であり、その根元には地上のあらゆる生命の祖が無意識のうちに祀られているのではなかろうか。ドイツではクリスマスツリーの根元にプレゼントを置いてから交換するそうだが、贈与や交換とい

う互酬的利他行動が人間において著しく発達したのも、生命の樹があらわすような普遍的血縁の思想がその裏側で働いているからだと思われる。

注

(1) 次のリンク先画像を参照。

http://darwin-online.org.uk/converted/scans/manuscript_scans/1837-9_Transmutation/Notebooks/DarwinArchive_1837_NotebookB_CUL-DAR121.-_038.jpg

参考文献

- Boehm, C. 2012 *Moral Origins: The Evolution of Virtue, Altruism, and Shame*, Basic Books.
- Caspari, R. and S.-H. Lee 2004 “Older age becomes common late in human evolution,” *Proceedings of National Academy of Sciences of the United States of America*, Vol.101.
- Copeland, S. R. et al. 2011 “Strontium isotope evidence for landscape use by early hominins,” *Nature*, Vol.474.
- Dagg, A. I. and L. Harding. 2012 *Human Evolution and Male Aggression: Debunking the Myth of Man and Ape*, Cambria Press.
- Lalueza-Fox, C. et al. 2011 “Genetic evidence for patrilocal mating behavior among Neandertal groups,” *Proceedings of National Academy of Sciences of the United States of America*, Vol.108.
- Lovejoy, C. O. 2009 “Reexamining human origins in light of *Ardipithecus ramidus*,” *Science*, Vol. 326.
- McBrearty, S. and A. S. Brooks 2000 “The revolution that wasn’t: a new interpretation of the origin of modern human behavior,” *Journal of Human Evolution*, Vol.39.
- Nowak, M. A. with R. Highfield 2011 *SuperCooperators: Altruism, Evolution, and Why We Need Each Other to Succeed*, Free Press.
- Vanhaeren, M. et al. 2006 “Middle paleolithic shell beads in Israel and Algeria,” *Science*, Vol.312.
- 青木健一 (2001) 『『間違い』ではなく『適応』としての近親交配』, 川田順造編『近親性交とそのタブー』, 藤原書店
- 榎本知郎 (1998) 『性・愛・結婚—霊長類学からのアプローチ』丸善ブックス
- 河合信和 (1999) 『ネアンデルタールと現代人—ヒトの500万年史』文春新書
- 河合信和 (2007) 『ホモ・サピエンスの誕生』同成社
- ダンバー, R. (1998) 『ことばの起源—猿の毛づくろい, 人のゴシップ』青土社
- 西田利貞 (2007) 『人間性はどこから来たか—サル学からのアプローチ』京都大学学術出版会 (学術選書 026)
- 平山朝治 (1995) 『イエ社会と個人主義—日本型組織原理の再検討』日本経済新聞社
- 平山朝治 (2003a) 「人間社会と精神の起源」平山 [2009] 1巻所収
- 平山朝治 (2003b) 「社会主義の致命的な誤謬とは何か？」平山 [2009] 2巻所収
- 平山朝治 (2007a) 「大乘仏教の誕生とキリスト教」平山 [2009] 3巻所収
- 平山朝治 (2007b) 「1世紀の思想革命とローマ帝

国・インド間貿易」平山 [2009] 3巻所収

平山朝治 (2008) 「貨幣と市民社会の起源—日本市民社会の源流を探る」平山 [2009] 3巻所収

平山朝治 (2009) 『平山朝治著作集 1巻～5巻』中央経済社

平山朝治 (2009) 『平山朝治著作集 1巻～5巻』中央経済社

平山朝治 (2011) 「記紀皇統譜の女系原理—天日槍 (=天彦火) 王家の復元」『筑波大学経済学論集』第63号

平山朝治 (2012) 「日本神話にみる自由主義のなりたち」『筑波大学経済学論集』第64号

山極寿一 (2012) 『家族進化論』東京大学出版会

平山 朝治 (筑波大学人文社会系)